

神の聖さを畏れる

(サムエル6・1～15)

一、「ウザの死」をどう読むか

聖書には、難解と言われる箇所があります。今回指定された箇所も、その一つかと思われます。王となつたダビデが、「神の箱」をダビデが備えた天幕に運び入れようとした時に、事件が起きました。6節、7節です。

「彼らがナコンの打つ場まで来たとき、ウザは神の箱に手を伸ばして、それをつかんだ。牛がよろめいたからである。すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神はその過ちのために、彼をその場で打ち死ねた。彼はそこで、神の箱の傍らで死んだ」というのですから、これを読んでいる私たちはショックを受けるわけです。なぜだつたのでしょうか。こういう難解な箇所は、丁寧に読み解いていくことによって、聖書が語らんとしていることの意味が見えてまいります。

二、ダビデと「神の箱」

「神の箱」は、その昔祭司エリの時代に、イスラエルがペリシテ人との戦いで敗れ、ペリシテ人に持ち去られた「主の契約の箱」のことです。しかしひペリシテ人の地では、立て続けに不吉なことが起きて、ペリシテ人たちは非常に恐れ、それを荷車に載せて、一頭の雌牛に引かせて、イスラエルに送り返しました。こうして「神の箱」は、キリヤテ・エアリムに住むレビ人アビナダブの家に安置され、エルアザルとその息子ウザとアフヨラによつて守られ、20年が経ちました。3節に「彼らは、神の箱を新しい荷車に載せて、それを丘の上にあるアビナダブの家に安置する」とあります。この箇所だけを読んでも分かりません。歴代誌第一章にこう書かれています。(1)に、

ダビデは千人隊の長、百人隊の長たち、すべての隊長と合議し、イスラエルの全集団に向かつて、言った。「(略)私たちの神の箱を私たちのもとに持ち帰ろう。私たちは、サウルの時代には、これを顧みなかつたから。」すると全集団は、そうしようと言つた。すべての民がそのことを正しいと見たからである」と。サウル王の時代、「神の箱」は全く顧みられませんでした。そういうことがあって、ダビデは千人隊の長、百人隊の長たちすべての隊長と合議し、イスラエルの全集団に向かつて、言ったたわけです。3節を見てまいります。「彼らは、神の箱を新しい荷車に載せて、それを丘の上にあるアビナダブの家から移した。アビナダブの子、ウザとアフヨがその新しい荷車を御した」とあります。

「彼らは、神の箱を新しい荷車に載せて」を読んで、私共は何も感じないと思ひます。また6節より、「神の箱」を載せた荷車を、牛が引いていたことを知ります。「これを読んでも、私共は何も感じないと思います。ですがユダヤ人は、これがいかに大きな過ちであったかが分かるわけです。「神の箱」は荷車に載せる物ではありませんでした。民数記4章15節にはこう書かれています。「宿營が移動する際には、アロンとその子らが聖所と聖所のすべての用具をおおい終わつてから、その後でケハ車に載せて、それを丘の上にあるアビ

ければならない。彼らが聖なるものに触れて死ぬことのないようにするためである。(これらは、会覓の天幕でケハテ族が運ぶ物である)と。「神の箱」を運ぶのは、レビ人の中のケハテ族の務めでした。しかも、荷車に乗せるのではなく、肩に担いで移動させるものでした。新しい荷車に載せて、牛に引かせる運び方は、かつてペリシテ人が「神の箱」をイスラエルに送り返した時のやり方でした。ということは、ウザもアフヨもレビ人でありながら、律法の書に書かれていることを知らないこともあります。イスラエルでは長い間、「神の箱」が顧みられなかつたこともさることながら、「律法の書」も顧みられていました。イスラエルでは長い間、「神の箱」が顧みられなかつたこともさることながら、「律法の書」も顧みられています。ダビデもそれなかつたことが分かります。ダビデも知りませんでした。こうして事件が起きました。**(6・6～7)**と。ダビデはたいそう驚いたようです。8節です。**(ダビデの心は激した。主がウザに対して怒りを発せられたからである。**

(略)と書かれていることから分かります。ダビデは「神の箱」をエルサレムの天幕に運び入れたいと思わなくなりました。9節、10節です。**(6・9～10)**と。ところがです。11節にはこう書かれています。**(6・11)**と。すると、ダビデの思いが変わりました。12節です。**(6・12)**と。律法にそつて、レビ人の、おそらくケハテ族が担いで運び上げたことが分かります。